

4 重点目標を達成するための今年度の取組と評価基準・評価結果（R05年度末）

A 重点	C短期経営目標（年度末までにどのような状態にするか）	具体的な方策	具体的な取組		成果		自己評価					
			評語	取組に関する指標	評語	成果指標	取組指標		成果指標		考察(コメント)	改善策
							中間	年間	中間	年間		
1 知 （確かな学力）	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る。学習したことがよくわかり楽しく学習している児童を90%以上とする。	一人一台タブレットと学習アプリMonoxerの活用による授業改善・授業改革の研究に取組む。学習におけるICT機器・学習アプリの活用、学習状況の把握と適切な指導・支援を行う。	A	思考、話し合、活用の学習時間を増加した	A	児童の肯定的評価90%以上	12	16	B	A	全校90.2%。分かりやすく教えてくれたり、詳しく教えてくれたりする97.1%であり、児童の教員への評価は高い。児童の意欲や関心、学習方法の決定等、個に応じた学習形態が取れてきている。	一人一台端末を生かし、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体として学ぶために、学びのスタイルを複線型とし、クラウド環境を活用した授業を開発していきたいと考える。
			B	学習アプリを効果的に活用した	B	児童の肯定的評価85%以上	18	12				
			C	ICT機器を効果的に活用した	C	児童の肯定的評価80%以上	18	21				
			D	十分な取組ができなかった	D	児童の肯定的評価75%以上	1	0				
2 徳 （豊かな人間性）	自信のあるところとないところを含め、自分自身にいたい満足している児童を80%以上とする。	良さに【気付く・見付ける・感じる】そして【伝える・認める・褒める】に年間をとおして取組み、児童の自己評価を育て高める。	A	保護者と連携し取組んだ	A	B+6年生70%以上	13	12	A	A	全校84.8%、低学年90.9%、中学年85.5%、高学年76.7%（5年72.0%、6年82.6%）。中間評価より低・6学年が上がった。下がった3・4・5年生とも学年の学級間で15%の差があり、学級経営の工夫改善が必要である。	教職員の取組だけでなく、児童同士の感想の交流、保護者の協力を得た児童への良さのフィードバックを継続する。児童一人一人が活躍する場、仲間との交流や協働の中で達成感や成就感を得られる場を年間を通して計画する。
			B	学級だよりを活用して取組んだ	B	児童の肯定的評価80%以上	4	4				
			C	日常の指導に取り入れた	C	児童の肯定的評価75%以上	24	25				
			D	十分な取組ができなかった	D	児童の肯定的評価70%以上	1	2				
	自分を大切にしている児童を90%以上、友達を大切にしている児童を95%以上とする。	相手の考えを汲み取る力、コミュニケーション能力の育成・向上のための取組を行う。（ソーシャルスキル・トレーニング、グループエンカウンター、ピアサポート等）	A	日常の授業や活動に取り入れて実施した	A	自分90%以上、友達95%以上	11	12	B	A	自分全校90.1%、低94.6%、中88.3%、高86.7%（5年生88.1%、6年生84.8%）。友達全校98.7%。自分についての中学年は、8学級中6学級が中間より下がった。児童の発達段階に留意した自己評価の高め方を工夫する必要がある。	SSTやグループエンカウンターの活用を学年で計画し、月2～4回の実施を継続して取組む。自分を大切にすることをめつには、自己評価を高めることが必要である。学校と家庭で協同して取組む。
			B	取組を2か月に3回以上行った	B	自分85%以上、友達90%以上	2	4				
			C	取組を1か月に1回以上行った	C	自分80%以上、友達90%以上	8	2				
			D	十分な取組ができなかった	D	自分80%以上、友達85%以上	9	7				
	人と関わること・（遊び・学習・生活）が楽しいと感じる児童を90%以上とする。	縦割り班活動、学年合同授業、異学年交流学習の実施。ひまわり学級との交流（児童の交流と、教員のひまわり学級への授業参加・参観）	A	縦割り班・異学年交流に取組んだ	A	児童の肯定的評価90%以上	24	23	C	B	異学年交流91.2%。ひまわり学級87.3%。特にひまわり学級との交流遊びを実施した学年は高い。ひまわり学級と通常級とのボッチャ体験や遊び等の交流、運動会や学芸会の感想交流を実施。たてわり班も復活した。	今年度の活動を基に、求める児童像や交流計画をブラッシュアップする。ひまわり学級との交流は全学年で実施する。
			B	ひまわり学級交流（児童・教員）に取組んだ	B	児童の肯定的評価85%以上	12	15				
			C	学年交流に取組んだ	C	児童の肯定的評価80%以上	12	17				
			D	十分な取組ができなかった	D	児童の肯定的評価75%以上	3	3				
3 体 （健康・体力）	安全に気を付けて生活している児童を95%以上、困ったことや悩みがあったらだれかに話すことができる児童を80%以上とする。	安全教育プログラムを活用し、生活安全、交通安全、災害安全のすべてについて継続的に指導する。	A	状況に対応した指導を適切に実施した	A	安全に気を付けて95%以上話すことができる80%以上	21	22	C	B	安全96.6%。自転車シミュレーター、歩行シミュレーターの経験はとても有効だった。話す75.2%（1年84.1%、2年80.0%、3年68.3%、4年75.0%、5年65.8%、6年79.3%）話せる割合は増加しているが、クラス替えのあった3,5年生の指標が低い。SOSをだれにでも発信できるための「教職員と話そうビンゴ」は有効だった。	SC等と連携し、自分を出しにくい児童に対しての指導を継続する。安全教育プログラムの研修の定期的な実施を計画する。クラス替えのあった3,5年生について、人間関係づくりのための取組（グループエンカウンター等）を計画的に実施する。中野第一小として、児童に開放された校長室を伝統としたい。
			B	必ず指導する基本的事項を指導した			13	15				
			C	3つの安全領域を理解して指導した	B	安全に気を付けて95%以上話すことができる70%以上	8	11				
			D	十分な指導ができなかった			0	1				
		SOSの出し方に関する教育を全学年で発達段階に応じて系統的に実施する（特に長期休業日前）。全児童が教職員の誰かに話してみようという体験活動を行う。	A	自分に相談してもらえるよう工夫した	C	安全に気を付けて90%以上話すことができる65%以上	14	19				
			B	重点時期の他にも指導した			13	12				
			C	具体的なSOSの出し方を指導した	D	安全に気を付けて90%未満話すことができる65%未満	15	17				
			D	適切に指導できなかった			1	2				
	体を動かして遊んだり運動したりすることは楽しい児童を90%以上とする。	休み時間の外遊びの奨励と体育館の開放、体力向上月間（6月、10月、2月）の実施。楽しさを実感させる工夫や声掛けに取組む。	A	楽しさを実感させる工夫や声掛けをした	A	B+「とても」が75%以上	14	18	A	A	全校95.1%。とても77.9%、ぜんぜん2.1%、あまり2.8%。取組の効果が表れている。休み時間に校庭や体育館で遊ぶ・体を動かす児童が増えた。マラソン・縄跳び、クラスでの長縄跳びに取組んだ。	運動する・体を動かすには、その価値を感じていることが必要である。運動を楽しむ、続けていくための運動有能感について確認し、育み高める取組を全校で継続する。
			B	休み時間の取組を行った	B	児童の肯定的評価90%以上	17	14				
			C	体力向上月間に重点的に指導した	C	児童の肯定的評価85%以上	5	12				
			D	十分な取組ができなかった	D	児童の肯定的評価80%以上	3	4				
	健康に気を付けて、元気に生活している児童を95%以上とする。	心と体の関係についての体験的学習の充実（保健・心と体）。スクールカウンセラー・心の教室相談員との連携、生活指導の情報共有と全教職員の統一した支援。	A	SC等と連携して支援した	A	児童の肯定的評価95%以上	20	23	B	A	全校94.2%、低95.7%、中96.3%、高89.1%。高学年へのアプローチが必要である。心と体の関係について校長が講話した。養護教諭が計測時に健康についての指導した。生活指導夕会を継続実施した。	年間を通しての、児童理解のための生活指導の情報共有会を計画する。不登校対応に特化したプロジェクトチームの活動と校内の別室整備など、取組の充実を図る。
			B	心と体の関係について指導した	B	児童の肯定的評価90%以上	15	18				
			C	ねらいに沿った体ほぐしの運動を実施した	C	児童の肯定的評価85%以上	9	7				
			D	体験的学習ができなかった	D	児童の肯定的評価80%以上	1	0				
4 働 き 方	ライフ・ワーク・バランスを推進する。	時間外勤務の上限について月45時間、年間360時間とする。男性職員の育業等取得を促進する。定時退庁日を設定する。	A	前月の結果を次月に生かした	A	年360時間以下の教職員が90%	7	4	C	C	年間360時間以上は36人中14人。中間からの増加は1人であった。取組を継続し、来年度当初から実施できるようにする。定時退庁日の設定により、教職員の意識が変わってきた。	自己のライフワークが充実することを第一に、時間の使い方を個人で無理なく設定できるようにする。時間外勤務が多い教職員への定期的な声掛けを継続する。
			B	早く退勤する日を決めて勤務した	B	年360時間以下の教職員が70%	16	16				
			C	定時退庁日におおよそ取組めた	C	年360時間以下の教職員が50%	9	12				
			D	十分な取組ができなかった	D	年360時間以下の教職員が30%	5	3				
5 保 幼 小 中 連 携	教科・生活指導等において発達段階や学びの連続性を踏まえた意図的・計画的な指導の工夫を行い、一貫性のある継続的な指導を行う。	心の教育を重点とし、二中校区の学校・家庭・地域で育てたい児童・生徒像を共有し、道徳教育を中心として取組む。	A	発達段階や学びの連続性を踏まえた指導の工夫に取組んだ	A	校区の願いに応じた道徳授業の改善ができた	11	19	B		心の教育を重点に取組むことを3校で確認するとともに地域に発信した。道徳アンケートの実施・考察による重点指導項目内容を決め、道徳授業年間指導計画の修正を行った。	小中連携の目的について、小・中学校が考える必要性、課題意識の確認が必要である。
			B	道徳授業の改善に取組んだ	B	自校の状況に応じた道徳授業の改善ができた	15	16				
			C	校区で育てたい児童像を共有した	C	実態に応じた指導計画の改善ができた	8	11				
			D	十分な取組ができなかった	D	十分な取組とならなかった	5	2				